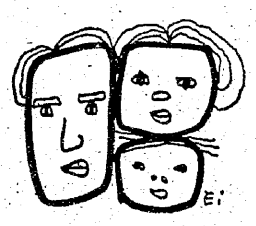
短歌　俳句　川柳



歴史を生みし おみなたち

宮浦　高椋龍生

警官の排除ゆるさじと体ごと縛りあい坑底の座りこみつづくる
坑底の主婦に闘う寄せ書きをするときひとりでに声となりくる
百四十四時間坑底座り込みし歴史を生みしみいけのおみなら
よせ書きを腹に巻きつけ千人力得しと坑底よりの便りは
警官の導入ゆるさじとピケを張る鉱門の上照る夏の月

生命堵して

三川　木村　守

憤然と主婦ら座れる斜坑底COガスの生ぜしあたり
政治への不信は主婦ら七十名坑底にCO法確立叫ぶ
政争にかけひきさるるCO法主婦ら憤然生命堵せり
主婦の眼に画く難かり一千のCO罹患者あがりし姿
憤然と主婦坑底に六昼夜闘いきCO法審議成る
誰が斯くもこの人たちを苦しいへ。四百五十八の命を奪った現実
闘いに追込んでいくのか。爆発かはかくすべくもないのに大資本ゆ
ら三年九カ月、ただ息あるのみにえに責任不問、機械化、合理化に
て言葉一つ出せない。スポーツマ機械の一部に化しつつある労働者。
ンのたくましかった身体はどこ、文化国家の現実。
爆風に破れて吐ける揚水の凄惨斜坑に百余の遺体
斜坑道に水魔暴れて昇坑の百余の命粉砕されき
幾百トンの水魔暴れき斜坑道に砂利諸共に砕け散る人
埋もれて憤死の友は掘られけり眼、口、耳を塞ぎたるどろ
爆風にとばされ軌条ポイントに上半身なき屍絡まる
爆風にとびて幾日探されき炭塊に似て汚れたる首

ありありと焼きついた爆発の凄惨、虚空に伸ばされた拳に何がつかまれたであろう。幅灯は一点を照射して動かない。この上に加えようか、二体、三体、五体、坑木を積むように炭車に集る遺体、「おーい良いか」、「よし」、遺体を載せた炭車が二十輌、三十輌後から後から数増えて昇坑の坑口をめざす。

はいく

宮浦　高椋龍生

虫
みそなわすご先祖さまや梅雨の漏
あしもとのこころもとなき子猫かな
落蟾をまともにくらひし五器冠（ごきかぶり）

くらがりも美しきもの虫しぐれ
さきがけてねむりし妻に虫の鳴く
虫をきき三池闘争ふりかえる
ひとすじのいのちを燃やす極暑かな

坑底座り込み

火蛾狂い　坑底座り込みつづく
火蛾狂うポリ　ゆるさじとピケをはる
動員のすみたる汗のヤッケ脱ぐ
坑底の汗のしみたる手紙かな
坑底の母の文読む日焼けの子
坑底の母の文書く裸の子

馬渡の盆行事に激励の便り

▼馬渡分会のお盆の行事は、第二組合関係からさえ期待されている。いや、全国各地から注目されてきていて、こんどは大阪府の寝屋川市の児玉兼良さんという人から、激励の便りがきた。

「三川鉱坑底座り込みは、主婦の皆さん本当にご苦労さまでした。

今年も盆行事が盛大に行なわれるそうですね。子どもたちが、大牟田のことばかり言っています。いまでもお化け屋敷のことを思い出して、楽しかったことをみんなで話し合っています。こちらは何にもありませんので、三池の良さがわかります。

差別や低賃金の中でもひるまず、たゆまず活動される皆さん方に心から感謝致します。

ここに少しばかりですが、お盆行事にご使用下さい」

▼…そして千円同封されていた。

（馬渡分会の緒方分会長から提供されたもの）

詩　太陽のない労働者

四山　岩下トシオ

太陽を見ない労働者たち
きのうも　きょうも
また、あすも
ずうっと太陽をみないだろう

そこに働く労働者たち
炭壁に向かって掘る
汗と炭粉にまみれて
いつも　同じ炭を削っている
きのうも　きょうも
また、あすも
要求をもっている男たち

敵に対してはきびしい目
味方にはやさしい男たち
きのうも　きょうも
また、あすも

太陽のない場所で
悪水と暑さに耐えながら
子どもやまごのため
妻や親たちのために頑張るのだ
きのうも　きょうも
また、あすも

太陽のない場所で
炭じんの爆発があった
四百五十八名が殺され
なお、千人近くが病院通い
きのうも　きょうも
また、あすも

太陽が全然ない所
うごめく手足、身体
はい出る屍
キャップランプは輝いていた
いつも元気だった男たち
もう、死んでいた
あすも　あさっても葬式だろう

太陽のない場所で
ガスに殺された仲間たち
屍となった仲間たち
働けなくなった仲間たち
首切られようとしている仲間たち
きのうは殺され　きょう葬式
あすは、また仲間が……

太陽のない労働者たち
いつも元気な男たち
キャップランプに光る笑顔
自信にみちた
未来を知った仲間たち
きのうも　きょうも
また、あすも力強く
生きるだろう

太陽のない労働者たち
明るい未来がかがやいている

（四山五分会の転場新聞から）

川柳・小柳重義

時事

汚職又めぐる歯科医のクサレ縁
失言の名も代議士のコブとなり
罰金が上がりダンプの荷が重い
一芝居打ってナセルの再軍備
国会のデモへ首相の衣替え
水害の犠牲帰らぬ子に詫びる
公明党政治資金でねらわれる
貧困へ病気がなぐり込みをかけ
抜けるだけ抜いて政府の提示案

CO闘争

願っても足りない署名また頬み
いい足らぬ声が必死の座り込み
あたたかい湯気が座り込みへ来る
CO立法銀輪デモの意気上がる
頑張れとあしたを叫ぶ見舞品
地底から怒り爆発した抗議
目かくしの涙誇りへ見せぬ顔
制定の母仏壇へ灯をともし

"みいけの闘い"の一場面

討論のなかから学び……
大きく前進した
「みいけの闘い」アピール隊の行動（下）

三川　前田幸恵

熱気にあふれて

二十一日

会場全体が熱気のこもった雰囲気につつまれていた。私たちの舞台は毎日もってきた真剣な討議にある総括会議で、みんなが見違えるほどの気魄に満ちていた。社青同・社会党・労大婦人会議主催の会場は、ほとんどが若い青年婦人で占められ、会場全体が"みいけの闘い"に参加している感であった。

会場に、安保闘争で警官に殺された樺美智子さんのお母さんも姿を見せ、最後に"私も三池の労働者と共にたたかいます"というあいさつと花束が贈られた。

合理化あるかぎり

二十二日

『三池と安保でたたかわれた三十五年、日本の労働者の先頭に立ってたたかった三池労組が七年を経た今日なお健全としてたたかっていることを、この詩劇を通じてはっきり確認しました。この詩劇は単なる劇ではありません。私たちはそこに強く感動しました。

今国会を通過したCO立法は決してCO患者を人間らしく取り扱うものではありません。昨年の労災補償打ち切りは、CO患者を人間として以前の、生物であることを否定したものでした。今国会で成立したCO立法はその生物として生きながらえることを補償したにすぎません。CO患者が、そして労働者が人間らしく生きるために、みんながたたかわなければなりません。この三池の若々しいたたかいのエネルギーに接し、私たちも確信をもってたたかう』

福岡・戸畑・熊本・そして名古屋・東京と照明・裏方と積極的に協力いただいた日放労の中央委員長＝上田哲さんからの第三日目を終えたときのあいさつである。

私たち一人ひとりの胸の中にも"CO立法ができたからといって、たたかいは決して終りはしない。ガス患者がいる限り、労働災害がなくならない限り、転場での労働者をしめつける合理化がなくならない限り、私たちはたたかいつづける。三井はこの三川爆発の責任を何一つとっていない。私たちはこのことを決して許せない"と決意が固まっていった。それは私たちみいけの闘いアピールに対してよせられた、多くの仲間の支えや励ましの中に、私たちのたたかいの正しさ、重要さを再確認してきたからである。

なんでも語ってよかった

二十三日

各班ごとの昨夜の討議に引きつづき、午前中全体を通じての総括が徹底的に討議された。私たちは毎日もってきた総括会議によって大きく前進した。そしてみんながCO闘争は自分の問題である。これから一層転場や地域でのCOのたたかいを具体的にとり組むことを確認しあった。とくに主婦会・婦人部からは、合宿して徹底した討議に参加し、感情に流されやすい女性は、組織的訓練について青年部に大きく遅れていることを反省し、学ばされたことがだされた。

真実を語る

午後、この詩劇が今日にまとまる最初の役割りを果した「新制作座」と代表による交流を行なった。お互いに共通する苦しみや喜びがあることを知り、同じ仲間として夜が更けるまで話しはつきなかった。

「いい俳優は演ずる人ではなく語る人である。昔は俳優とは民衆を代表して真実を語った。しかしそれが金をもらって権力者の思うままの演ずる人になった。真実を語ることは思想がなければ語ることはできない。そして真実を語らなければ人の心をとらえることはできない。だから演劇とは自分の人間改造である」という話に、三池に生まれた"みいけの闘い"こそ、労働者の作りだす文化運動の芽が生れているのではないかと思った。